

色調の変化と印象

抄 録

世の中にはたくさん色がある。それらの色は、それぞれ意味を持っていると言われており、色が与える印象と絵の関係性について研究を行った。研究から、色が元々持っているイメージのようなものは、絵の場合でも作用するが、そこには元の絵の印象等が付加されることがわかった。この研究が、多くの人が色の持つ力を理解し、生活に上手く応用するための助けになることを願う。

キーワード 色相, 明度, 彩度

1. はじめに

この研究をすることにしたきっかけは、美術の授業等で作品を鑑賞する際、似たような作品でも色調が違っていると印象が変わることに疑問を持ったことである。参考文献でも、各色のイメージについては載っていたものの、絵に応用するとどうなるのかは書いていなかった。そこで、色調の変化と絵の印象について調べることにした。

2. 研究方法

2.1 文献調査

それぞれの色が持つ印象と、どのような場面でそれが活用されているのかを調べる。また、色が与えるイメージ（温度、重さなど）についても調べる。

2.2 実 験

抽象語から連想される色を答えてもらうアンケートを行う。その後、絵に応用した際に感じる印象についてのアンケートも行う。

3. 文献調査

【色から感じるもの】

① 重さ

色が濃いものは重く感じ、薄いものは軽く感じる。

② 温度

暖色、寒色など。赤、黄色などは暖かく感じ、青、水色などは冷たく感じる。

③ 味

甘い	ピンク，薄い黄色。 桃やカスタードクリームのような甘い食べ物。
辛い	鮮やかな赤，黒。 唐辛子やコショウのような辛い食べ物。
酸っぱい	鮮やかな黄色，薄い黄緑。 レモンなど，柑橘系のような酸っぱい食べ物。
苦い	濃い茶色。 コーヒーやキャラメルのような苦い食べ物。

食品パッケージなどには，こういったイメージごとの色が目立つところに使用されている。

⑤ 音

音から色を連想する人は，個人差はあれど常に同じ音からは同じ色を連想するようだ。高い音は明度が高く，低い音は明度が低い傾向にある。

【明度・彩度・色相】

- ① 明度…色の明るさを表す度合い。
明度が高いとは，元々の色みに白が混ざった色を指す。
- ② 彩度…色の鮮やかさを表す度合い。
彩度が低いとは，元々の色みにグレーが混ざった色を指す。
- ③ 色相…ある色を他の色と感覚的に識別するよりどころとなる色の特徴。色合いとも言う。

4. アンケート①

内容…抽象語からの連想色

対象…50人程度

未回答…3人

形式…①番号を選んでもらう。

②複数回答なし。

③氏名・性別・年齢などの記入なし。

目的…人間の感情についての色のイメージを明らかにする。

方法…①「喜び」「怒り」「悲しみ」「楽しみ」の四つの項目から，色をイメージしてもらう。

②色見本の中から，一番合っている色を選んでもらう。

その他…①色見本は全40色。

②色見本は全て手書きのため，若干の色ムラがある場合がある。色ムラがひど

く、どのような色なのかわからない場合、別のきちんとした色見本を見せる。

③使用したペンは、Tooが販売しているコピックマーカー（白のみポスカ）

反省点…①アンケートを取った年齢に偏りがある。

②手書きのため、時間がかかった。

③「イメージした色が見本の中にある」ということがあった。

④複数回答不可であることを用紙に書いていなかったため、複数回答している人が数人いた。そのため、わかる人には回答し直してもらったりと、手間をとった。

【結果】

喜び	鮮やかな赤，鮮やかな黄色，薄い黄色，薄いピンク， 薄い黄緑 など
怒り	鮮やかな赤，濃い赤，濃い紫，濃い青，濃い青緑， 薄い茶色，黒 など
悲しみ	濃い青，薄い青，グレー，薄い紫，薄い青緑，薄いピンク， 黒 など
楽しみ	鮮やかな赤，鮮やかな黄色，薄い黄色，薄い青，鮮やかな緑， 濃い赤 など

※票数が多かった順。

【結果からわかること】

- ①「喜び」と「楽しみ」は、共通する色が多かった。
- ②「喜び」「楽しみ」は暖色系の色が多い。
- ③「怒り」は、人によって回答がバラバラで、色相に違いがあった。
- ④「悲しみ」は、ほとんどが寒色系だった。
- ⑤ たまに異色な例外が存在した（「悲しみ」の薄いピンクなど）
- ⑥ 複数回選ばれている色は18色。
- ⑦ 一度も選ばれなかった色は11色。

【考察】

- ①「喜び」と「楽しみ」は、色のイメージが同じグループに属している。
- ②「喜び」「楽しみ」「悲しみ」は、多くの人の色のイメージがある程度一致している。
- ③「怒り」は、「噴火するように爆発させて怒る」のか、「氷のように冷静に怒る」のかのどちらをイメージしたのかで、色の違いが出たと考えられる。
- ④ 同様に、「悲しみ」は、「大泣きしながら悲しむ」のか、「ずーんと落ち込んで悲しむ」のかで、色の明度に違いが出たのではないかと考えられる。

5. アンケート②

内容…絵の色調の変化と印象

対象…50人程度

未回答…なし

形式…①自由に印象を言ってもらおう。

②複数回答あり。

③氏名・性別・年齢等の記入なし。

目的…アンケート①の結果をふまえた上で、色の印象を絵に応用したときの関係性を調べるという本研究の目的を明らかにする。

方法…①「オリジナル」「モノクロ」「青系」「混合」の四つの、色調を変えた色の印象を考えてもらう。

②自由に回答してもらおう。また「喜怒哀楽」のどの印象に当てはまるかも答えてもらう。

その他…①「混合」とは、アンケート①の結果で、「喜怒哀楽」それぞれで一位だった色を合わせたものである。

②パソコンで色調を変えている。

使用した絵

岡本太郎「壁画レリーフ」



【岡本太郎について】

岡本太郎…「太陽の塔」で知られる洋画家。

原色の多用と激しい筆触が特徴。

「壁画レリーフ」は、旧東京都庁舎に彼が作った作品である。

反省点…①準備に時間がかかってしまい、前に行ったアンケートからかなり期間が空いてしまった。

②質問の仕方が悪かったのか、なかなか思ったような答えが聞けず、答えて欲しいことをなかなか引き出せなかった。

③当初は自分で何か絵を描く予定だったのだが、このアンケートを実施するの

が夏休みも後半になってからだったため、時間がなく、既存の絵を使用することになってしまった。

【結果】

オリジナル	楽しい、いきいきしている、怒り、面白い
モノクロ	怖い、静か、つらい、怒り、悲しい、寒い
青系	悲しい、失望、爽快、不安、緊張
混合	喜び、楽しみ、悲しみ、怒り

(喜怒哀楽のイメージ)

オリジナル	喜び、楽しみ、怒り
モノクロ	悲しみ、怒り
青系	悲しみ、怒り
混合	喜び、楽しみ、悲しみ、怒り

【結果からわかること】

- ① 「オリジナル」と、その他の絵の印象は、全て一致しているわけではない。
- ② アンケート①の結果はある程度反映されている。
- ③ 唯一、「怒り」だけが四つの絵のどれにも当てはまっている。
- ④ 「混合」では、全てのイメージが当てはまっている。
- ⑤ 真逆のイメージが混在している場合がある。
- ⑥ アンケート①にはなかった回答もある。

【考察】

- ① 色調が変わったことで、絵の印象が変わっている。
- ② 色の印象は、絵に応用しても反映される。
- ③ 「怒り」がどの絵にもあげられているのは、アンケート①でわかったように、「怒り」のイメージが個人によってかなり変わるからだと考えられる。
- ④ また、元の絵の顔のような部分が怒っているように見えることから、「怒り」のイメージがわくとも考えられる。
- ⑤ 「混合」では、全ての色のイメージがある程度反映されており、どの色を一番強く感じるかで印象が変わってきていると考えられる。
- ⑥ 「青系」で、マイナスなイメージの回答が多い中で、「爽快」というプラスな答えが得られたのは、元々の絵の印象が付加されたからだと考えられる。

6. 全体のまとめ

- ① 色にはそれぞれイメージがあり、多くの人が見る傾向が強い。
- ② もちろん感じ方には個人差があるため、同じ色でも感じる印象は人によって異なる。
- ③ 色相は同じなのにイメージなどに違いが生まれるのは、明度・彩度が異なるからであ

る。

- ④ 色には「色彩感情」というものがある。
- ⑤ 同じ言葉でも、どのような様子を連想するのかによってイメージする色は違う。
- ⑥ 色調が変わると、絵の印象も変わってくる。
- ⑦ しかし、全て塗り替えられてしまうわけではなく、元々の絵のイメージに色のイメージが付加される。

7. 感 想

絵と色の関係について、「何かイメージが違う、納得がいかない」と自分の作品を見て思ってしまうのは、自分の色彩センスがないせいだと思っていたが、配色などでイメージ操作ができるとわかって驚いた。研究していく中で、そういった配色についての本も出版されていることがわかったので、今後も日常生活にも応用していけたらいいと思う。

8. 参考文献

- 宮田久美子（2015）『色のパワーで心も体も元気になる！人生が豊かになる色彩心理』
ナツメ社
- 前田耕作（2000）『東洋美術史』美術出版社
- 高階秀爾（1990）『西洋美術史』美術出版社
- 辻 惟雄（1991）『日本美術史』美術出版社